

# 乳幼児期のふたごの子どもをもつ子育て支援

—サークルに参加している母親の子育て仲間からのサポート・

育児肯定感・育児負担感に焦点をあてて—

## Child rearing support for parents with twins at the infant stage: Focusing on affirmative feeling for child-rearing, child-rearing anxiety, and support by peers of mothers who participate in parenting groups

森下 順子

Junko morishita

### 要 約

本研究の目的は、多胎児を育てている親への子育て支援について検討することである。そこで、自主サークルふたごぐみに参加している母親を対象としたアンケート調査を実施し、育児肯定感・育児負担感・子育て仲間からの道具的サポートと情緒的サポートについて検討した。結果、育児肯定感・子育て仲間からの道具的サポート・情緒的サポートとの平均値は高く、育児負担感については平均値が低い結果となった。多胎児の妊娠、出産、育児のプロセスには様々なリスクを抱えるため、多胎児の子育てを支援する特別な配慮・援助が必要であると考えられる。

### はじめに

近年、多胎児出産が増加している。厚生労働省の「人口動態調査」における日本の出生総数は、1970年は約193万人であったのが2013年は約103万人とほぼ半数近くに少している。しかし、ふたご以上の多胎児の出生数は約2万人と横ばい状態を維持している。多胎児の出生率は、1970年には約1%であったのが、2013年には約1.94%と2倍近くとなり、100件に1件が多胎家庭といわれている<sup>1)</sup>。

我が国においては、地域の希薄化、核家族化等により、孤立した子育てをせざるを得ない家庭が多い。ひとりの子どもを育てている親も孤立し子育ての負担感を感じているなか、多胎児を育てている親へのサポートはなお必須であると考えられる。

筆者は、子育て支援を通して、ふたごを育てている親との交流を継続している。2015年と2016年には、勤務校の平成25年度文部科学省地(知)の拠点整備事業、子育て支援を主軸地とした地(知)の拠点事業「きょう育の和」の「共育の輪」の活動で「みつご・ふたご大交流会」を実施した。さらに、2017

年度は、地域の方々にも多胎児を育てている親との交流を通して、社会の理解と協力が得られることを願って参加枠を広げて実施した<sup>2, 3)</sup>。

本交流会に参加した多胎児の親へのアンケート調査では、参加した理由として、「ふたごを育てている友達がいないので交流の機会になればと思った」「ふたごの子育ての悩みを共有したいと思ったから」「ずっと家にいたから」などである。また参加してみた感想では、「共感しあえた」「相談できてよかった」「ふたご本人の気持ちが聞けてよかった(ふたごの学生がふたごの気持ちを語る)」などがあげられた。

この企画を運営するにあたり、多胎児の母親と交流を深める中で語られたことは、ひとりの子どもを育てる悩みと、ふたごを育てる悩みは異なるということであった。例えば、地域で開催されている様々な「子育てひろば」の取り組みに参加したことがあるが、工作は一人の親でふたりの工作を仕上げなければならない、手遊びなどの親子遊びは一人にかかりつきりになれなく子どもがかわいそうに思い自分を責めてしまう、ふたり平等に関わって遊んであげることができず、参加することで疲れ果ててしまい、子育てに自信がなくなるなどの声であった。

また、ふたごを比べられたり、妊娠プロセスを聞かれたりなど、何気ないことばに対して傷ついてしまい、子育てひろばに参加することによりストレスが増すことがあるようだ。このようなことから、多胎児の同じ立場の親同士が、悩みを相談でき支えられる機会が必要であることが、ふたごを育てている親の語りから理解できる。

勤務校所在地である和歌山市の多胎児の現状は、平成 26 年 66 組、平成 27 年 55 組、平成 28 年 72 組であり全体の出生率の約2%が多胎児である<sup>4)</sup>。多胎児関係の支援としては、多胎妊婦と1歳半までの多胎児とその親を対象とした年4回開催される「さくらんぼひろば」西保健センターの支援がある<sup>5)</sup>。その他には、多胎児の親が立ち上げた「ふたごぐみ」の自主サークルである。

この現状から、行政の支援は1歳半までと年齢制限があり、外遊びやお友達との交流が必要な時期のひろばがないこと、ふたごを育てながらの自主サークル運営にも限界があることから、ふたごの子育て支援を充実させていく必要がある。

そこで本研究では、自主サークルに参加している8名のふたごをもつ母親の育児肯定感・育児負担感・子育て仲間からのソーシャルサポートの現状について把握する。ふたごサー

クル「ふたごぐみ」は、主に未就園児までの双子・三つ子等の子どもと親、多胎妊婦を対象としたサークルで、主に月1回活動している団体である。主な内容は、多胎児育児に関する悩み事の分かち合いや、情報交換、保育プログラム、育児用品の交換などである。

本調査は、親子がつながり支え合える関係性が構築されている母親が対象である。本結果をもとに、多胎児育児への子育て支援について考察をくわえたい。

## 方法

調査対象:ふたごぐみサークルに参加する母親8名

手続き:ふたごぐみサークルの代表者に、アンケート調査実施の協力をお願いし、協力を得られた母親に記入してもらった。倫理的配慮として、個人が特定されないことを明記、個々の調査票は封筒に入れ個人が特定できないように回収したことの2点である。

期間:平成28年8月～10月

質問項目:

属性は、5項目を設定した。「年齢」「職業」「家族形態」「子どもの人数」「未就園の子どもの数」

育児肯定感は、荒牧・無藤<sup>6)</sup>を参考に4項目を設定した。「子どもを育てるのは楽しいと思う」「子どもを育てることは、有意義ですばらしいことだと思う」「子どもの成長が楽しみだと感じる」「子どもを育てることによって、自分も成長していると感じる」

育児負担感は、中嶋・種子田<sup>7)</sup>を参考に4項目を設定した。

「子育てによって自分の健康が損なわれる気がする」「子育てでそのものにしんどさを感じる」「子育てに何となく自信が持てない」「子育てに疲れて育児を放棄したくなる」

子育て仲間からのサポートについては、小牧・田中<sup>8,9)</sup>を参考に、道具的サポートと情緒的サポートを用いた。道具的サポートは、「わたしの苦労に対して助言してくれる」「わたしの子育て子育てに役立つアドバイスをしてくれない(逆転項目)」「わたしが子育てに新たな知識を得ることに力を貸してくれる」の4項目である。情緒的サポートは、「わたしが子育てで落ち込んでいるとき、元気づけてくれる」「わたしが子育てで悩んでいるとき、相談にのってくれる」「わたしの子育てを『あなたのやり方でよい』といってくれる」「わたしが子育てで気が動転しているとき、同情を示してくれる」の4

項目である。

育児肯定感、育児負担感、子育て仲間からのサポートについては、5 件法での回答を得た。

## 結果

アンケート対象者である母親の平均年齢は、31.3 歳であった。専業主婦 4 名、兼業主婦 1 名、育児休暇中 3 名であった。家族形態は、核家族 6 名、拡大家族 2 名であった。子どもの数は、2人 5 名、3人 3 名であった。

育児肯定感・育児負担感・子育て仲間からの道具的サポートと情緒的サポートの項目得点の平均値は表1に示すとおりである。育児肯定感・子育て仲間からの道具的サポートと情緒的サポートともに項目得点は「ややあてはまる」から「よくあてはまる」の高得点であった。育児負担感の項目得点は、「どちらともいえない」から「あまりあてはまらない」の低得点であった。

育児肯定感・育児負担感・子育て仲間からのサポートの尺度得点の平均値は図1に示すとおりである。育児肯定感・子育て仲間からの道具的サポートと情緒的サポートは「ややあてはまる」、育児負担感については「あまりあてはまらない」という結果であった。

表 1. 育児肯定感・育児負担感・ソーシャルサポートの項目得点の平均値

項目	平均値
<b>「育児肯定感」</b>	<b>4.69</b>
子どもを育てるのは楽しいと思う	4.63
子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う	4.75
子ども成長が楽しみだと感じる	5.00
子どもを育てることによって、自分も成長していると感じる	4.38
<b>「育児負担感」</b>	<b>2.81</b>
子育てによって自分の健康が損なわれる気がする	3.13
子育てそのものにしんどさを感じる	2.75
子育てに何となく自信が持てない	3.25
子育てに疲れて育児を放棄したくなる	2.13
<b>「子育て仲間からの道具的サポート」</b>	<b>4.34</b>
わたしの子育ての苦労に対して助言してくれる	4.25
わたしに子育ての方法を教えてくれる	4.38
わたしの子育てに役立つアドバイスをしてくれない(逆転項目)	4.38
わたしが子育ての新たな知識を得ることに力を貸してくれる	4.38
<b>「子育て仲間からの情緒的サポート」</b>	<b>4.44</b>
わたしが子育てで落ち込んでいるとき、元気づけている	4.50
わたしが子育てで悩んでいるとき、相談にのってくれる	4.50
わたしの子育てを「あなたのやり方でよい」といつってくれる	4.25
わたしが気が動転しているとき、同情を示してくれる	4.50

\*逆転項目は逆転化した平均値を示している

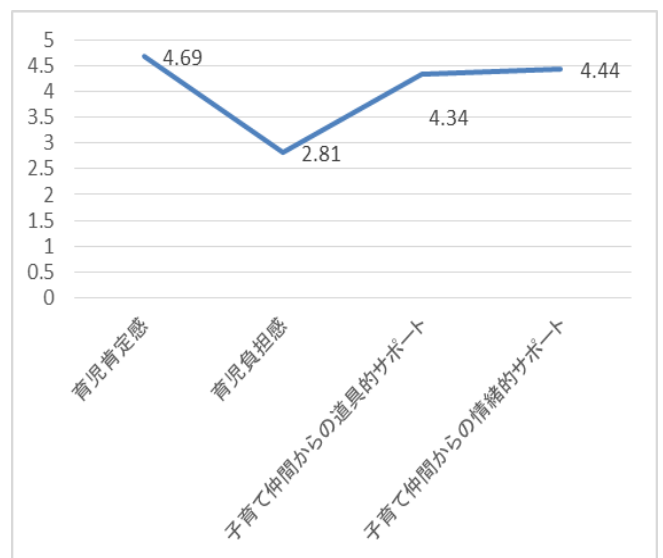


図 1. 育児肯定感・育児負担感・子育て仲間からのサポートの尺度得点の平均値

## 考察

多胎児をもつ母親は、妊娠から出産までの経過において、母子ともに健康上のリスクを抱えている。出産後も、母子の健康上の問題や、家族への影響などさまざまな問題を抱えている。

多胎児を育てる保護者と、その親子を支える家族に対しては、特別な支援と配慮が必要である。そのためには、医療機関、保健所などの行政が連携してハード面を支え、ソフト面としては、地域が多胎児の子育てに理解を深め支えていくことが望ましいと考える。

対象者8名のうち、核家族6名であることから、母親がふたご育児を主に担っていることがわかる。多胎児をつれての外出は、母親ひとりでは困難であり、家庭内で孤立しやすい、そのために子育てに関する情報を得ることが難しく、子育てに困難を抱えやすくなる。また、多胎児の60%は37週未満の早産、70%は低出生体重児として生まれる<sup>1)</sup>。このように、子どもの発達上のリスクを抱えている家庭も多く、それぞれの家庭に応じた適切な支援が必要であると思われる。行政機関の特別なハード面の支援の充実が求められる。地域でも、行政や民間の子育てひろばなどの場が充実してきているが、多胎児限定のつどいの場は限られているのが現状である。多胎児を育てている親への支援は、多胎児に対しての理解と専門性のあるスタッフに関わり、多胎育児をしている親同士がつながり支えあえる環境づくりが必要である。

本調査対象者は、ふたごサークルに参加している母親であった。子育ての孤立から解放され、同じ立場の母親や先輩ママとの交流を深め、支え合いながら子育てに奮闘している親であり、子育てを前向きに頑張っているケースであるとも捉えられる。

サポート面では、子育て仲間からの情緒的サポート(4.44)、道具的サポート(4.34)を得られており、子育て仲間の存在が大きいことが伺える。このふたごサークルを卒業した先輩ママが、現在もふたごサークルに寄り添い支え、子育ての悩みや不安を当事者として相談にのることが、未就園児のふたごを育てている親にとって大きな存在であり、支えになっていることには間違いない。

育児負担感は、平均値2.81であり、想像以上には育児負担を感じていない結果であった。ふたごのみの子育てをしている親が5組であり、負担は大きいと思われるが、同じ状況の親からのサポートがあるから、負担が軽減されていると考えられ

る。また、子育て仲間からのサポートを受けやすい環境にあることからこのような結果であったと考えられる。

以上より、多胎育児には単胎育児とは異なる悩みがあり、まずは多胎児を育てている親が孤立しないよう、多胎児を育てている親同士が集える場所や機会を増やす取り組みが必要である。

現在、和歌山県内でのふたごの育児サークルの活動の一例は、基本月1回の活動が現状である。そのサークルを運営しているのは、多胎児を育てている当事者の親であるため、運営に関する負担は大きいと思われる。開催会場や情報発信等のハード面の支援と、ソフト面の支援として、悩みや相談ができる人的環境や、同じ立場の多胎児育児をしている親との横のつながりと、先輩ママなどからアドバイスがもらえるような縦のつながりができる機会を設けることが望ましいと考える。また、安心して語り合いができるよう、子どもの見守りや、一緒に子どもと遊んでくれるスタッフがいることが理想であると考える。

本研究の限界と課題は、1点目は調査人数が少なかったこと、2点目は自主サークルふたごぐみに参加している親へのアンケート調査のため、孤立した多胎児の育児を行っている親への調査ができておらず、今後の課題である。

## 参考文献

- 1)一般社団法人日本多胎児支援協会(2011)多胎支援ガイドライン～ふたご・みつごを、安心して産み、育てるために～。
- 2)森下順子(2016)子育て・子育て支援ネットワーク「共育の輪」ふたご・みつご大交流会の実践報告, 信愛紀要第56号, 17-21.
- 3)森下順子(2017)子育て・子育て支援ネットワーク「共育の輪」構築に向けた実践的研究, 和歌山信愛女子短期大学きょう育の和センター平成25年度文部科学省地(知)の拠点整備事業「子育て支援を主軸地とした地(知)の拠点事業「きょう育の和」平成28年度成果報告書, 55-63.
- 4)和歌山市保健所(2016)人口動態統計報告書(出生統計).
- 5)和歌山市(2017年9月発行), 市政わかやま.
- 6)荒牧美佐子・無藤隆(2008)育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い―未就園児を持つ母親を対象に―, 発達心理学研究, 19(2), 87-97.
- 7)中嶋和夫・種子田綾(2004)障害幼児の母親の育児負担感と

精神医学的障害の関係, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 11(1), 31—36.

8)小牧一裕・田中國夫(1993)職場におけるソーシャルサポートの変化, 関西学院大学社会学部紀要, 67, 57—67.

9)小牧一裕・田中國夫(1996)若年労働者におけるソーシャルサポートの効果, 社会心理学研究, 11(3), 195—205.

